

## 2. 思い出すままに 佐々部 英男(京都大学名誉教授)

「中世英語英文学研究会中期の活動」について執筆せよとのご依頼であったが、生憎手元に資料がないので、記憶を頼りにするほかなく、それも 30 年以上まえのことなので、甚だ漠然とした一文でご容赦願いたい。

年 2 回行われた例会の研究発表タイトル・発表者名の一覧は同研究会が幕を閉じる前に、パンフレットにして会員にお配りはしたが、それも現在手元にない。それと「中期の活動」といわれても、英語史の時代区分以上に曖昧で、「思い出せる」のは 80 年近く使い古した灰色の脳細胞の中に残っている「中世英文学」についての残像以上のものではない。

研究会は終わり近くまで、ある程度研究者のいる同志社大・関西大・京都大の三校が当番校となり、最後に関西外語大が加わったと記憶する。以下スペース節約のため敬称を略して研究者名を列挙する。

同志社大 上野直蔵・滝本二郎・斎藤 勇・大泉 昭夫・二村宏江  
関西大 広瀬捨三・広岡英雄・和田葉子  
京都大 御輿員三・佐々部英男・豊田昌倫・永野芳郎・六反田 収  
関西外語大 水鳥喜喬・吉村耕治

記載漏れがあるかもしれない。上野、滝本、広瀬、御輿、水鳥の諸氏は故人。当番校以外の研究者で忘れ得ぬ方々は、(故)成瀬正幾・(故)大場啓三・(故)関本栄一・田中幸穂・宗和實正・三浦常司・須藤 淳・野口俊一・伊藤忠夫・海老久人・米倉綽・中尾祐治・(故)斎藤朋子・浜口恵子等。研究会発足後早い時期に他界された会員として吉田新吾も忘れられない。同氏は京都大学での筆者の先輩で、昭和 23 年頃石田憲次教授の大学院演習 *Chaucer* でご一緒した。

研究発表の分野は 14 世紀あたりが多く、OE については宗和・大場・佐々部ぐらいで、最後の関西外語大でははじめて OE の本格的な研究を拝聴したような記憶がある。

京都大について付言すると、御輿は中世文学の専門というよりも英詩の歴史の一環として中世の英詩も読まれたようだ。昭和 30 年代前半に書かれた『26 の群像—カンタベリー物語序歌訳解』(南雲堂)は筆者に文学の楽しさを教えてくれた。豊田も中世文学よりも文体論に打ち込み、永野も比較言語学、六反田もイタリア文学との関連で研究会に参加していた。会の運営は専ら筆者が当たった。

筆者も教養英語を忠実に教えることを第一に心掛け、余暇を中世英語の研究に当てたが、結局研究の成果らしいものは挙げられなかった。後に『中世の英語—覚書』(あぼろん社)をだしたが、研究とは程遠い。訳書『梟とナイチンゲール』は昭和 36 年の冬 Oxford の tutorial で C. L. Wrenn 教授に読んで戴いた作品だが、*Early Middle English Verse and Prose* でも巻頭を飾っているように、Chaucer 以前ではまず熟読すべき text であろう。余談だが、当時 Wrenn 教授は大変感じのいい女子学生も指導しておられたが、先年来日した Jane Roberts, Professor of Anglo-Saxon, King's College, London だ。

話を本題に戻すと、東京の談話会との交流もあり、繁尾 久、都留 久人(いずれも故人)など来

られた。筆者も談話会に一度顔を出したが、研究会よりもはるかに盛況で質疑も活発な印象を受けた。

外国の学者の講演も何度かあり、一々は思い出せないが、Yale 大学の Marie Borroff が来たおりに同教授が吹き込んだ *Cadmon Record* を紹介したら喜んでおられた。中世の英詩は耳で楽しむのが手っ取り早い。

だが講演で一番思い出深いのは Bruce Mitchell 氏だ。生憎京大文化祭と重なり、外からの騒音の中で、満員の聴衆を前に OE についてたっぷり話をされた。日本の研究者の意欲を感じられたにちがいない。

将来の参考になるようなことは何ひとつ申し上げられないが、言葉の研究は一人一人が土台から築かねばならず、下手をすると、Alfred 大王が *Cura Pastoralis* の序文で嘆いたように、退歩することも考えられる。OE・ME いずれに比重を置くにせよ、言語の連続性を考えると、一方だけというのは片手落ちで、さらに現代英語の十分な知識が土台となる。

それと中世研究にラテン語は必修だ。45年前 Wrenn 教授に「日本の大学の英文科ではラテン語が必修です」といったら大変感心され ‘I take my hat off to Japan!’ と言われた。

**Festina Lente !**